



AUGUST

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

2019
NEWYEAR

あირისმისტირია! ショートストーリー

あირისმისტირია!

～小さな少女たちと彩る思い～

加賀宮孝一

βサービス実施中!!

あირისმისტირია!

～少女のつむぐ夢の秘跡～

2月21日発売予定

PlayStation®4

大図書館の羊飼ひ-Library Party-

スタッフ対談

あირისმისტირია!

～少女のつむぐ夢の秘跡～

＊まえがき

Introduction

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧いただきありがとうございます。

2018年9月13日にサービスを再開した

『あいりすミステリア!』ですが、お陰様で大変多くのお客様にお楽しみいただいております。

誠にありがとうございます。

全てのプレイヤーの皆様に、厚く御礼申し上げます。

日々プレイしていただいている方もどんどん増え、

先日はついに累計ご登録者様が50万人を突破。

望外のご好評に、開発側としても身の引き締まる思いです。

今後もより一層お楽しみいただけるよう、

新規コンテンツの作成や全体的な改善に

取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(未プレイの方も、基本無料で始められる

ブラウザゲームなので、触っていただければ幸いです)

また公式サイトやTwitterにて、

数ヶ月先までのスケジュールも公開しておりますので、

そちらもぜひご覧くださいませ。

それでは、多少のお時間を拝借いたしますが、

オフィシャルハンドブックをお楽しみください。

2018年12月 オーガスト/ARIAスタッフ一同



AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2019 NEWYEAR

- 3 あいりすミステリア! ショートストーリー
あいりすロリティア! ～小さな少女たちと彩る思い～
- 9 βサービス実施中!!
あいりすミステリア! ～少女のつむぐ夢の秘跡～
- 9 PlayStation®4 版 2月21日 発売予定!
大図書館の羊飼い -Library Party-
- 10 スタッフ対談
- 11 あとがき

あいらすロリテイリア！

小さな少女たちと彩る思い

加賀宮孝一

「よつしや、追い詰めた！ 絶対逃がさないからねー！」

ラデイスがびしっと杖を突きだした。杖を向けられた魔術師は、岩壁を背にして俺たちと対峙している。黒いローブを纏っており、フードの奥にある痩せた顔には表情がない。虚ろな両目は井戸の底のように黒々としていて不気味だ。

「《アイリス》に勝つつもりなら別だけど、降参するなら今のうちやぞー！」

「そうですそうです！ 今なら種子をすばーんと抜くだけです！」

「……」

ラデイスとユーが降伏を勧めても魔術師は無言だ。足元であるローブが、冷たい風に揺れている。

ここは、ドワリンの僻地にある山岳地帯。荒々しい岩肌が薄雪で白く染まっている。種子の気配を追ってドワリンを訪れた俺たちは、『シーダー』となった魔術師と遭遇した。そして、なんとかこの場所まで追い詰めたのである。

魔術師の異様な雰囲気、ユーは引き気味だ。

「あ、あの、聞こえてるんでしょうか……？」

「変な魔術を研究して狂ってんじゃない？ めーおー、とりあえずやっちゃっていい？」

「いいけど、油断するな。何か企んでそうだ」

俺が指示すると、他の『《アイリス》』も即座に武器を構える。絵筆を手にしたエルミナはラデイスの隣に並んだ。この二人は幼馴染みであり、従姉妹でもある。連携の取れないコンビだ。

「同じ魔術師として負けられませんね、ラデイス。などで」

「だー！ すぐに頭撫でんなー！」

ラデイスに手をはたかれたエルミナが、わざとらしく泣く演技を始めた。

「うう……冥王さまには、いつも素直に撫でられているに」

「めーおーに撫でられるのは、けっこう好きだし……つて、なんの話してんじや！」

「きやうん！」

赤面したラデイスがエルミナのお尻を叩く。魔術師は相変わらずの無表情だ。前衛のベアが、ため息をつきながら振り返る。

「その凸凹コンビ、漫才は後にしなさい」

「いや、あたしは悪くな……のわっ!? わかったから味方にクナイ投げんなー！」

ラデイスが慌てて杖を構えなおす。エルミナも、俺にべろつと舌を出してから魔術師を睨んだ。

アシユリーやベアが一步步魔術師との距離を詰めていく。そのたびに緊張感が張りつめた。落ち着かないのか、俺の横でユーがそわそわしている。魔術師はやはり微動だにしない。

……魔術師に逃げ場はない。『《アイリス》』に囲まれ、背後は岩壁だというのに、この不安は一体なんだ？

「!? ちょい待って！」

ラデイスが叫ぶ。瞬間、俺たちの足元に広がる魔法陣。

「やばっ、異端！ 全員逃げ——」

「遅い」

魔術師の囁いた声と同時に、魔法陣が眩く発光する。

視界が白く焼けた。

「ひよわあああああつ!? 目が、目が——!? 冥王さ

まどこですかー!?」

「落ち着けユー、隣にいる！ みんなは!?」

ユーの手を握ってやりながら呼びかける。

「めーおー、あたしは大丈夫！」

「私もですつ。他のみなさんは……!?」

「くつ、視界が……! ですが、ご主人様の香りは記憶済み！ 嗅覚を頼りに今そちらへ！」

ラデイスとエルミナ、続けてベアの声が続く。他の『《アイリス》』は無反応だ。無事でいてくれ……!

やがて、ぼんやりと視界が蘇る。

「……は？」

思わず声が出た。ユーとベア、ラデイスとエルミナも唖然としている。逃げられたらしく、魔術師の姿はない。いや、今はそんな事よりも……。

「あの……この幼女たちは、どちら様ですか？」

ユーが震える声で言った。

先ほどまで『《アイリス》』の立っていた場所。そこに、入れ替わったように幼女たちがいる。びしっと敬礼するドワリンの幼女、歌って踊りはじめるラビリナの幼女、刀を枕にして寝る幼女——全員、とてもなく見覚えがあった。変わらぬ姿で立っているのはユーとベア、そしてラデイスとエルミナだけだ。

ユーがだらだらと汗を流す。

「これってもしかして……あは、はは。いやいや、そんなわけありませんよー」

「先ほどの魔法陣で『《アイリス》』が幼児化したのでしよう。弱体化の魔術」

「うわーん！ はつきり言わないでくださいベア トリーチェさん！ これからどうすればいいんです

カー！？」

頭を抱えるユーとは対照的に、ベアとラデイスは冷静だ。

「ラデイス。なぜ、わたくしたちには影響がなかったのですか？」

「めーおーとユーとベアは人じゃないから。あたしとエルはギリギリ魔術で防いで……エル？ おーい、エル、聞いている？」

エルミナは幼児化した《アイリス》を見つめて立ちずくんでいる。ラデイスに揺さぶられて、ようやく口を開いた。

「冥王さま……ここにありました」

「え？ 何が？」

「私の寮園はここにありました……！ 右を見ても可愛い幼女！ 左を見ても可愛い幼女！ ああ、私は今、幼女に包まれています……！！……ふらっ」

エルミナが鼻血を出して気絶した。



エルミナを起こして、近隣の村に戻った俺たち。

ひとまず、幼女となった《アイリス》を冥界に帰すことにした。見た目相応に弱体化しており、戦力にならないからだ。ついでに精神的にも幼くなっている。

「では、わたくしは幼女どもを連れて冥界に帰ります。」

「主人様、どうかご無事で」

礼をしたベアの頭に、猫耳の幼女……ラウラが飛びのった。小さくなってさらに好奇心旺盛になっている。

ベアは頭に乗ったラウラをそのまま肩車してやり、さらに両手は他の《アイリス》と繋いでいる。

「どこからどう見ても、子供好きのお姉さんだな」

「そんなことはありません。学生の世話は教師の義務ですから。……こほん、それでは失礼します」

照れ顔を隠すようにベアが歩きだした。後ろを幼くなった《アイリス》がついていく。……アヒルの親子みいだな。

ベアたちを見送ったユーが「よし」と気合いを入れた。

「ラデイスさん。あの魔術師を倒せば、みなさんは元に戻るんですよ？」

「うん。逆に言えば、倒さないと一生このまんま」

「ごくり……それもありかもしれません……ひやうんっ！？」

ラデイスが無言でエルミナのお尻を叩いた。

「ユー。とりあえず種子の気配を探ってくれるか？」

「了解です。むむむ……ぴーん！ 反応ありました！ あつちです！」

ユーが自信満々に北の方角を指差した。すると、ラデイスが難しい顔になる。

「こつから北つて、ほんとと森だけど？ あとは、誰も住んでない村があるくらい」

「そこを隠れ家にしてるんじゃないか」

「なるほどね。確かに、変な魔術を研究するならうつつの場所だわ」

「では、出発です！」

意気揚々と歩きだすユーの後に、俺たちも続こうとする。

「待つてくださいー！」

「ずこっ」

エルミナに引き止められてユーがつまずいた。

なぜかエルミナは切なそうに絵筆を握りしめており、ただ事ではない様子だ。ラデイスが心配そうに歩み寄った。

「ちよ、ちよつとエル、大丈夫？ いきなりどしたん？」

「さつきから……溢れて、止まりそうにないんです」

エルミナが潤んだ瞳で俺たちを見回す。

「可愛い幼女たちを見たいせいで、絵描き欲が溢れてしまつて……発散させないと、また鼻血が、鼻血が」

「よっしゃ発発するぞー」

「ああんつ。待つてくださいーラデイス。冥王さま、お願いします。私に絵を描く時間を……！」

エルミナが俺に迫ってくる。……魔術師と戦つてる最中に鼻血を出されると困るな。

「じゃあ、一枚だけだぞ」

「本当ですか!? ふふ、ありがとうございますっ」

弾むような足取りでエルミナが抱きついてきた。ラデイスは仕方なさそうに髪を掻き、ユーは困ったように笑っている。豊かな胸元をぎゅぎゅうと押しつけてきたエルミナが、ようやく俺から離れた。

「では、いつも通りラデイスの絵を……いいですよな？」

「却下」

「ええっ!？」

「あたしの絵なんて、昔つから何枚も描いてるでしょ。どうせ描くなら他の絵にしまつて」

「そんな……しくしくしく」

落胆するエルミナの顔を、ユーが励ますように叩いた。

「たまには風景を描いてみましょう。向こうにすつ……綺麗な山がありましたし、行ってみましょう」

「はあ。小さな女の子を描きたかったのに……ユー、精霊パワーでもうちよつと小さくありません？」

「無理です！」

「相変わらず病氣やなー」

ラデイスが肩をすくめた。

エルミナのスケッチブックは、小柄な《アイリス》やリリーの絵で埋め尽くされている。中でもラデイスの絵が一番多い。やはり、幼馴染みで親友だからだろうか？

「そういえば、エルミナってなんで絵を描きはじめてんだ？ 聞いたことなかったよな？」

「あ。それあたしも知らない。教えてよエル」

「ん……うふふ、恥ずかしいので内緒です」

唇に手を当てて微笑むエルミナが、ちらつとラデイスを見た。

「では、ユー。綺麗な山の見える場所に案内してください」

「はい、こつちです」

ユーがエルミナの手を引いて歩きだした。遠ざかる背中を見ながら、ラデイスに話しかけてみる。

「エルミナ、残念そうだったぞ。一枚くらい描かせてあげてもよかったんじゃないか？」

「駄目駄目。ああでも言わないと、エルは小さい女の子の絵ばかり描いちゃうから」

ラデイスは呆れ声だ。

「女の子の絵ばかり描いて、エルの才能が腐ったらもつ

「たいたいじゃん？ あいつには、ちゃんと絵の才能を磨いてほしいの」

「本人が楽しそうだし問題ない気もするけど」

「かもしれないけどさ、なんか悔しいんだよね。あいつの絵が、世界から評価されてないっていうのが」

エルミナは、かつて宮廷絵画師を務めていた程の腕だ。才能をさらに磨けば、世界的な絵師になるのは夢ではない。だが、本人に全くその気が無いのである。幼女を見つけては描き、幼女を見つけては描き……エルミナは己が満足するために筆を走らせている。

「いつかまた、エルが絵の仕事をした時にさ……世界中を驚かせるような絵を描いてほしいの。だから、あいつの絵の才能をここで腐らせてくれない」

そこまで言うてから、ラデイスが不安げに俺を見上げてきた。

「めーおー、あたしの言ってることって変？ エルの……友達の才能が、世界中に評価されてほしいって思うのは……ただのお節介？」

「いや全然。人間っぽくて最高」

即答した。目を丸くしたラデイスが、数秒して弾けたように笑いだす。

「あははっ、何それ。やっぱめーおーって変わってるわー……ま、だから気が合うんだろうけどさ」

穏やかな表情のラデイスが肩を寄せ、ちらちらと俺を見上げている。頭を撫でてほしい時のサインだ。ラデイスの小さな頭をわしわしと撫でてやる。

——大切な友人のために思い悩む。そんな、人らしい心の機微が俺はたまたまなく愛おしかった。



木々の隙間から顔を出すと、森に囲まれた廃村が見えた。人の気配はなく静寂に包まれている。

横にいるユーが緊張の面持ちになった。

「どうだ、ユー？」

「はい。種子の気配がハッキリと……魔術師はあの村にいます」

「では、ロリ化の魔術を教えるもらってから懲らしめま

しょう」

「アホな魔術覚えようとすんなっ」

やる気満々のエルミナにラデイスがツツコミを入れた。

「み、みなさん。あれを見てください」

ユーが声を潜めた。朽ちた家から魔術師が出てきたのだ。黒いローブを引きずりながら、きよきよと辺りを見渡している。

「まさか、俺たちを探してるのか？」

「隠れてんだから気づくはずないでしょ。そんな、不意打ちでちゃちゃっ」と

ラデイスが言葉を止めた。魔術師がこちらを直視したのだ。

「危ないっ！」

「のわっ！」

エルミナがラデイスを突き飛ばすと同時、足元で魔法陣が光る。

一瞬だけ白に染まる視界。目の前には――

「……ふえ？」

絵筆を握った幼女が、不思議そうに俺を見上げている。

「エ、エル……!? ロリコンがロリになってどうすんだー!!!」

「ラデイスさん落ち着いて！」

「一旦逃げるぞ！」

幼児化したエルミナを抱え、木々をかき分けながら、俺たちはとにかく全力で走った。



体力が尽きるまで森を走り、せえせえと息を切らしながら口を開く。

「ユー。魔術師の……種子の気配は？」

「も、もう感じられませんが。追っついてはいないようです……はあ、はあ」

「なら、少し休憩だ」

抱えていたエルミナを下ろしてやり、草の上に座った。

ラデイスは立ちっぱなしのまま唇を噛んでいる。

「くっそ……いきなりすぎて防げなかった。あの魔術師、こっちに気づいてたんだ……廃村の周りに結界を張って

たんだと思う。あたしやエルでも気づけないくらい薄いやつ」

「終わったことを考えても仕方ない。エルミナは戦えなくなっただけ、こっちにはまだラデイスがいるし。なんとかなるって」

「めーおーのポジティブっぷり、尊敬するわ」

苦笑したラデイスが腰を下ろした。その膝の上に、幼くなったエルミナがちょこんと座る。

「お。どうしたエル？ にしても、ほんとこっちやくなっただな」

「じ……」

「な、なに？ あたしの顔、なんかついてる？」

エルミナはラデイスをじろろと見つめている。そして、素早くスケッチブックに筆を走らせた。ユーが関心した顔になる。

「おお。小さくなくても、やっぱ絵が大好きなんですね」

「そういえば……こんぐらい小さかった頃に、エルは絵を描きはじめてた気がする。で、なに描いてんの？」

「らでいすの絵」



舌つらずな話し方でエルミナが即答する。

「こんな時まであたしの絵かい!」

「らでいすの絵をかくの、すきだもん。はじめて絵をかいたときから、ずっとすき!」

「……初めて?」

ラデイスが首を傾げた。

エルミナが初めて絵を描いた時。それは、エルミナが

絵を描きはじめて理由にも繋がるはずだ。村で聞いた時は『恥ずかしいから内緒』と言っていたが……幼児化して素直になったのだろうか。

「初めての絵とあたしが……何か関係あるの?」

「わすれちゃったの!?!」

エルミナが頬を膨らませながらラデイスに振りかえる。「わたし、はじめて絵をかいたとき……らでいすの絵をかいたの。それを見せたら、いっぱいほめてくれたでしょ?」

「ああ。確かに、いきなり似顔絵を描いてきた日があった。あれ、あんたが初めて描いた絵だったんだ?」

「うん! ああ、絵を、らでいすがほめてくれたから……わたし、ずっと絵をかいてるの! えへへ……わたし、らでいすの絵をかくのがすき。らでいすに、絵をほめてもらうのもすき!」

「す、好き好き連呼するなっちゅーの!」

屈託のない笑みを向けられ、ラデイスが赤面した。

エルミナが絵を描きはじめて理由。それは、初めて描いた絵を親友に——ラデイスに褒めてもらえたからだだったのだ。

すると、エルミナのつぶらな瞳が不安げに揺れた。

「らでいすは……わたしの絵、今でもすき? いまは

……あんまり、すきっていつてくれない!」

「ま、まあ、最近は面と向かって言っていないけど!」

「らでいすの絵も、かかせてくれない……ほんと、いやだった?」

「違うってば! あれは別に嫌になったわけじゃなくて……あーもう!」

がしがしと髪を掻いたラデイスが、エルミナを真つすぐに見つめる。

「いい、エル? あたしの絵を描くって言ったのは、

エルのためになると思っただけ。勘違いさせちゃったなら謝っとく。それに、普段は恥ずかしくて言えないけど……エルの絵は今でも大好きに決まってる。あたしの絵とか、いつも描いてくれて正直嬉しい。あ、ありがとね!」

不安そうだったエルミナの表情に、ゆつくりと笑顔の花が咲く。

「そうなんだ……えへへ、そうなんだ!」

嬉しそうに身体をよじらせ、両脚をばたばたと動かしている。膝の上から落ちそうになり、慌ててラデイスが支えた。

ユーは目頭を押さえながら囁き漏らしている。

「ぐすつ、いい話です。全わたしが感動の渦に……って、あれ? エルミナさんの種子の力が……強くなってるよな?」

「マ、マジで!? エル、なんで急に強くなってるの?」

「まさか……自分の絵を、ラデイスに好きって言ってもうええからか?」

種子は宿つた者の精神に呼応する。エルミナの心を震わせた喜びが、種子の力を増幅させているのだ。元の状態には及ばないが魔力もかなり強くなっている。本人に自覚はないのか、ラデイスの膝の上でまた熱心に絵を描きはじめてた。

「め、めーおー! これならエルもまだ戦える……エルの絵画魔術があれば、あいつに勝てるって!」

「ああ。さつきは不意打ちを食らったけど、次はこつちが仕掛ける番だな!」

ラデイスと頷き合った。泣きやんだユーが拳を天に掲げる。

「よし、みんなでリベンジです! 魔術師を倒しましょう!」



再び廃村に近づく、魔術師はすぐに現れた。結果を張っているのは間違いないらしい。俺とユーは両手を挙げながら近づいていく。ちなみに、ラデイスとエルミナは別行動だ。

俺たちをじろりと睨みながら、魔術師が不快そうに口を開いた。

「なぜ、貴様らには弱体化の魔術が効かぬ。何者だ!」

「俺たち生まれが複雑なもので!」

「そうなんです。素直に言っても信じていただけるかどうか!」

「……!」

魔術師が無言で怒気を発した。俺は気にせず話を続ける。

「というか、なんでわざわざ弱体化の魔術なんて使ってるんだ?」

「弱い相手をいたぶるのが趣味だな!」

「わあ、素敵な! 趣味……!」

ユーがどん引きしている。

「だが、貴様らはすぐに殺す。何度も現れて不愉快だ!」

魔術師が手のひらを向けてくる。

すると、廃村の奥からラデイスが姿を現した。先にこつそりと侵入していたのである。俺たちに気を取られている魔術師は気づいておらず——

「すぐに殺すと言っただろう!」

「うあつ!」

響くラデイスの悲鳴。

振りむいた魔術師の手から放たれた魔力の槍が、ラデイスの腹を貫いていた。倒れ伏したラデイスはびくりとも動かない。

「あれ。やっぱ気付いてたか!」

「ほんとに結果を張ってるんですねえ。やっぱ不意打ちは無理そうです!」

ユーと一緒に頷くと、魔術師は怪訝そうに眉をひそめた。

「貴様ら、何を企んでいる?」

「結果が張られている以上、不意打ちは無理。弱体化の魔術があるから1対1も無謀。だから、数で攻めることにした!」

「数だと? 貴様らの戦力はもう……!」

言葉を切った魔術師が絶句したかと思うと、周囲の森に目を走らせなわたと震えた。結果が何かを感じた



のだらう。
「な、なんだこの数は！ 貴様ら、何人の仲間が……!？」
「「「いえーい！」「い！」「い！」」
いきなり響く声。直後、木々の隙間から人影が押し寄せた。
現れたのは、ラデイス、ラデイス、ラデイス……同じ姿をしたラデイスの大量だ。村中に散らばって暴れはじめている。魔術師は面白ほど狼狽した。
「こ、これは……!? あつ、こら！ 勝手に家に入るな！ 暴れるな……あいたあつ!?」

1人のラデイスが魔術師にタックルし、他のラデイスたちも大騒ぎである。

もちろん全員、エルミナの絵画魔術で具現化させた偽物だ。そのため、幼児化の魔術は通用しない。フリーダムに行動するという弱点も有利に働いている。腹を貫かれたラデイスも偽物であり、すでに霧になって消えた。偽ラデイスによる大海戦術。幼児化したエルミナの魔力では不可能な策だったが、種子の力がそれを変えたのだ。

「くそつ！ 魔術でまとめて……おい、やめろ！ ロープを引っ張るな！」
大量のラデイスに邪魔されて、魔術師は反撃すらできない。

さて、本物のラデイスはどこだ？

一軒の廃屋に目が止まった。屋根の上に立つラデイスが、俺たちを見て不敵に笑っているのだ。

「めーおー、ユー！ 離れてて！」

「あれが本物が。ユー！ 逃げるぞ！」

「了解ですつ！」

「待て……くつ、離せ貴様ら！」

魔術師は偽ラデイスたちに捕まって動けない。全力で走った俺とユーは、村から離れた場所へ振り向いた。

屋根に立っている本物のラデイスが、天に杖を掲げている。頭上には電撃を纏った光の球。パチパチと雷光を放ちながら巨大化している。

「お、落ち着け！ そうだ、お前に弱体化の魔術を教えてやるから——」

「うっさいわー！ エルを弱させた魔術なんか、覚えてたもんじゃないっての！」

ラデイスの怒りに反応したのが、頭上にある光球がまた膨らんだ。暴れて逃げようとする魔術師。偽ラデイスたちはまったく離れない。

「つてわけで、喰らえ！ これが……大

魔術師・ラデイス様の本気じゃー……!!」

ラデイスが杖を振りおろす。瞬間、巨大な光球が破裂し、無数の稲妻が斬り裂くように降りそぐ。

魔術師の絶叫は雷の轟音にかき消された。



「あー。今回はほんとに疲れたー」

ラデイスがぐったりと芝生に倒れこむ。ここは学園の中庭だ。魔術師を倒した俺たちは、種子を回収して冥界に戻ってきた。

「めーおー。今回のMVPはあたしでしょ？ 何かご褒美あるんじゃない？」

「ああ。よくやったな、ラデイス」

「それだけー？」

「はいはい」

隣に座って、仰向けに寝転がったラデイスの頭を撫でやる。

「えへへ。そーそー、これこれ♪ やっぱ、めーおーに撫でてもらうのは気持ちいい……めーおーが好きだからかな……なんて……あー駄目だ。変なこと言った。あたしやっぱり疲れてる」

ラデイスが自分で言ってる悶えている。そこに、元の姿になったエルミナがやってきた。

「あ、ラデイスだけ冥王さまに褒めてもらってる。ずるいですよ」

「ずるくないっての。最後に魔術師を倒したのはあたしだし」

「そんな。私だって、ラデイスをかばったりしたじゃないですか」

隣に腰を下ろしたエルミナがしなだれかかってくる。ぎゅつと抱かれた二の腕が、大きな胸に挟まれた。

「つたく、めーおーにおっぱい押しつけよって……さっきまで、あたしより小さかったくせに」

「ふふ、元に戻ってくれてありがとうございます。みんなもお礼を言っていましたよ。ロリロリ楽園は少しだけ惜しかったですが……あ、すみません冗談です」

本気の目だったが見なかったことにしよう。

俺に撫でられ続けているラデイスが、悪戯っぽい顔になった。

「にしても、エルが絵を描いている理由には驚いたなー。まさか、あたしに褒められたからなんて。あ、今でも褒めてほしいんだっけ？」

「さ、さあ、なんのことだか。幼女になっていた時の記憶がぼんやりしてて」

「はい嘘。あはは、エルが焦ってるのって珍しい」

「もう、ラデイス」

エルミナが頬を膨らませる。だが、すぐため息をついて微笑んだ。

「……そうですね。本当は全部、覚えてます。もちろん、ラデイスが今でも私の絵を大好きだと言ってくれたことも」

「うあー。恥ずいからそっちは忘れといてほしかった」

「あんなに嬉しい言葉、忘れられません」

そう言われて、ラデイスは照れくさそうに身を起こした。頬を赤らめながらエルミナと向き合っている。

「一応、もつたい謝つとく。あたしの絵を描く暇があつたら他の絵を描けーって言っちゃったのはさ……エルのためになると思つて言つたんだ。女の子ばかり描いてると、絵の才能が無駄になっちゃうんじゃないかと思つて。だから……勘違いさせちゃったなら、ごめん」

もじもじと両手を擦り合わせながら、ラデイスは話を続ける。

「あたし、エルの絵は世界中に認められるべきだと思つてる。そのためには、女の子だけでなく他の絵も上手くなくちゃいけないじゃん? なんて言うか、あたしはただ……その」

「エルミナの才能が認められないのが、悔しいんだろ? 親友として」

「ちよつ、めーおー。あうう……な、なんではつきり言っちゃうかなー」

ラデイスが深くうつむいて表情を隠す。エルミナは微笑みを絶やさないまま、ラデイスの顔を覗きこんだ。

「私の絵筆もパレットも、ラデイスのような子を描くためだけにあるんです。真っ白なカンパスに表現するのは、

女の子の愛らしさだけで十分。それに私、世間から評価されなくなつて……ラデイスや冥王さまに褒めてもらえれば満足です」

「……ほんととエルはぶれないなー」

ふつと息を漏らしてラデイスが笑った。

「わかった。そこまで言うなら、あたしがあーだこーだ言うのはもうやめる。エルはやつぱり、好きなものを自由に描けばいい」

「はい。でも……私のことをそんなに考えてくれていたのは、すごく嬉しいです。やつぱり、ラデイスは私の大事な幼なじみで、従姉妹で、親友です」

エルミナが包むようにラデイスを抱きしめた。ラデイスは抵抗することなく、エルミナの胸元に顔をうずめている。

「うん。あたしもエルはずっと親友だと思ってる。《アイリス》の連中はみんな好きだけどさ……や、やつぱりエルは特別だから……」

だんだんとラデイスが小声になる。すると、目を見開いたエルミナがぶるぶる震えはじめた。

「ふあああつ! ラデイスのデレは反則です! こんなに可愛い生き物、放つておけるはずがありません!」

「ちよつ、頬ずりしてくんなつ」

「冥王さまもそう思いますよね! うちの幼なじみ超可愛くないですか!」

「確かに。今のうちにしっかり見ておこう」

「め、めーおーまで……わぶつ!」

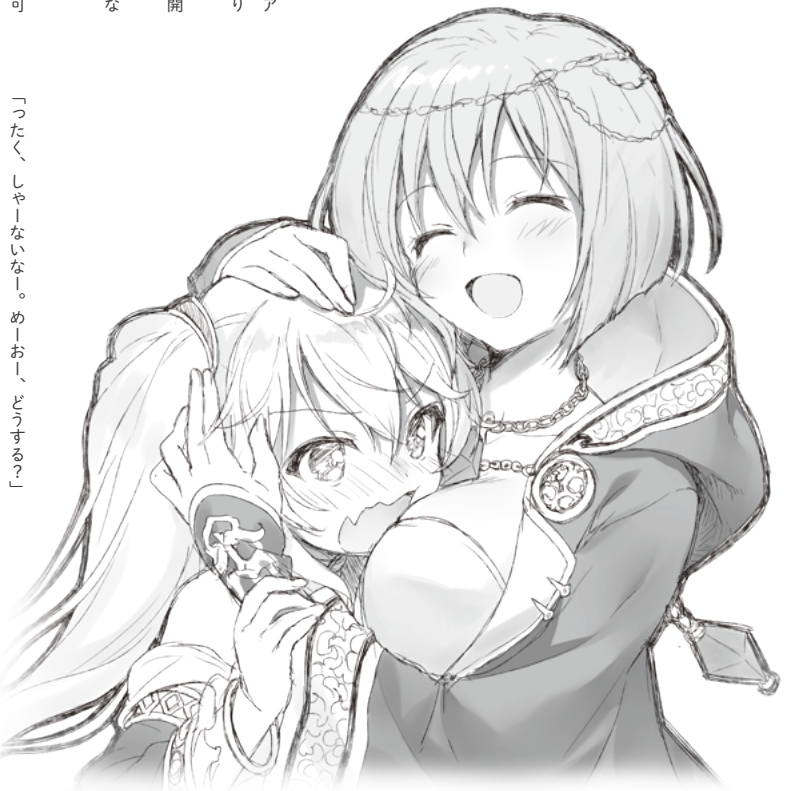
エルミナに抱きしめられたラデイスが、巨乳に顔を挟まれて苦しうに暴れている。

抱き心地をたつぷり堪能してから、エルミナはラデイスを解放した。そして、懐からさつとスケッチブックを取り出す。

「では早速、自由に描かせていただきますよう。ラデイス、冥王さま、そこに並んでくれますか?」

「あ、あ……ま、またあたしの絵? 魔術師と戦う時に死ぬほど描いたじゃん」

「大好きなのはいくら描いても飽きないんです。ほらほら、二人とも早くポーズを取ってください」



「つたく、しゃーないな。めーおー、どうする?」

「いいに決まつてる。それにラデイスも、エルミナに絵を描いてもらうのが好きなんだろ?」

「い、いちいち言わなくていいの!」

ぽこりと叩かれてから、並んで座つた。

熱心に筆を走らせはじめたエルミナを、ラデイスは柔らかな表情で見つめている。

二人の友情が優しく彩られていくのを感じた。本音を伝え合つたおかげだ。傍にいただけで、俺まで心が温かくなつてくる。この二人はきつと、いつまでも互いを思い続けるのだろう。

——美しい友情を目にして、俺は改めて人が好きになったのだつた。

NEW YEAR EVENT

日月出ずる新春の地

～姉妹の年越し双六対決!～

開催中!!

月華に祈る巫女
プリシラ

CV 猫村ゆき

日照らす日輪

ルージェニア

CV 和央きりか

あいらず・ミステリア!

～少女のつむぐ夢の秘跡～

βサービス実施中!!

タイトル あいらずミステリア! ～少女のつむぐ夢の秘跡～

プラットフォーム PCブラウザ *DMM GAMESよりログイン / AndroidOS

キャラクターデザイン・原画 べっかんこう / 夏野イオ シナリオ 榎原拓 / 内田ヒロユキ / 安西秀明

音楽 ActivePlanets CG箱彩 べべる / ひろた / 巻道 / 弥弛 他 背景美術 べべる

<http://dmm-imys.com>



© DMM GAMES / AUGUST

NEW RELEASE

大図書館の羊飼!

Library Party

PlayStation4® 版

2019年2月21日発売予定



シナリオ 榎原拓 / 内田ヒロユキ / 安西秀明

原画 べっかんこう / 夏野イオ

公式サイト http://aria-soft.com/daito_ps4/

スタッフ対談

べっかんこう×榊原拓

#50

2018.12.4 14:45 開発室にて

べっかんこう (以下「ベ」) さて、今回も対談の時間がやってまいりました！ってつい最近やった気がしますね。夏から冬は短いなあ。

榊原拓 (以下「榊」) 間に秋もありましたし、あつという間ですね。

ベ さて『あいミス』ですが、大変ありがたいことに、現在順調に推移していると聞いています。開発体制もさらに強化していきますよ！

榊 個人的にはiPhoneを使っているのにiOS版も待ち遠しいなあ。

ベ そうですねー。家で寝ながらプレイできると良いんですけど。お待たせしてすみません。

榊 『あいミス』といえば、めざしさんが描いてくださってる4コマ漫画が大好きなんですよ。おおお、こう来たか！ 仲良くて尊い……！ って毎回思ってます。

ベ 僕も好きです。キャラが生き生きとして良いですよー。一応僕もチェックをさせて頂いてるんですが、公開より先に見られて役得です。

榊 個人的には「ロリ画伯」に「エルミナ」ってルビがついてたのが最高でした。逆じゃないんだ！ って爆笑ですよ。

ベ あれは面白かったですね。僕はファムとイリーナの仲良しっぷりとかしょぼんとしてるシャロンとか、思わずにやにやしてしまいました。

榊 表情もいいですよー。これからも楽しみです。皆様も期待してお待ちいただければと！

ベ ですね！ ……さてさて、『大図書館の羊飼』のPS4版も無事に発売の運びとなりました。Vita版発売から4年近く経ちましたが、また新たにプレイしてもらえると嬉しいです。

榊 金魚もいいキャラなんで、楽しんでいたけると嬉しいです。グラフィックもフルHDなんですよー。

ベ ぜひ大画面でプレイしてください。金魚はお気に入りなのでいずれ登場する機会があるといいなあ。今回の小冊子のカットにも描かせてもらいました。そういや最近キャラの誕生日をまめにTweetしてますよね。よもぎさんやる気だな。

榊 過去作のヒロイン誕生日ツイートにもたくさんの反応をいただいて嬉しい限りです。……ヒロインの誕生日と言えば『機翼のユースティア』の娼婦3人娘、クローディア・リサ・アイリスですが誕生日が決まなくて誕生日ツイートができてないんですよ。あとメルトさんも。

ベ というか元々は、ユースティアは世界観がシビアめだから、メイン級のヒロインたちも今の暦の誕生日は無かったような。

榊 ええ。ファンタジー作品の小さなこだわりでした。

よもぎさんに言われて一応「現代の暦にすると〇月〇日」という体でメイン級ヒロインは決めたのですが。

ベ プリホリなんかもそうでしたよね。

榊 でしたね。「葡萄月」とか独自の暦があって。元ネタはフランス革命暦なんですけども。

ベ まあ1年が365日なのかどうか……そもそもプリホリはファンタジーなのかっていう。

榊 うっ……頭が……！ そこいくと『あいミス』はもう最初からがっつり現代の暦でヒロインの誕生日がありますね。

ベ まあ分かりやすいのがいいかもですね！



＊ あとがき

Postscript

オフィシャルハンドブックをお読みいただき、ありがとうございました。
お楽しみいただけましたでしょうか。

『あいりすミステリア!』はまもなくβサービスを終え、
正式サービスの開始を迎えることとなります。
大変長らくお待たせいたしました、ひとまずこの日を
迎えられてホッとしているというのが正直なところ。
オンラインゲームに携わって1年以上、
様々な経験を得ることができました。
この経験を今後に生かしていければと考えてともに、
『あいミス』もますます盛り上がっていけるよう
尽力してまいります。

そして現在、よりお手軽にプレイしていただけるよう
「iOS 版」「GooglePlay 版」の開発・申請も進めております。
こちらは審査があり、私たちやDMMさんの方で
開発が終わればリリースというわけにはいかないため
具体的な日程はお伝えできないのですが、
続報をお待ちいただければ幸いです。

『千の刃濤、桃花染の皇姫』のファンディスクですが、
2019年の夏頃の発売を目指して開発を進めております。
こちらも近いうちに正式に発表できればと思います。

寒い日が続きますので、皆様も暖かくしてお過ごしください。
それでは今回はこの辺で！

2018年12月 オーガスト/ARIAスタッフ一同



＊ AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

2019 NEWYEAR

企画・制作



<http://august-soft.com/>



<http://aria-soft.com/>

当小冊子の一部のページを撮影し、ブログ・SNS 等に転載していただくことは問題ございません。※全ページを複製配布することはご遠慮下さい。



AUGUST OFFICIAL HAND BOOK
2019 NEWYEAR

